

# ピアノ教材の検討

## —「L'ABC」「L'AGILITE」の分析—

笠井 かほる

### I はじめに

ピアノを習い始めると言うとき、決まってバイエルから、そして、練習経験を問う、あるいはピアノの進度を問う時のバロメーターとして、ツェルニー 100 番、30 番、ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタレベルといった言葉をよく耳にする。これは歴史的に初めて日本に導入された教材が、これらドイツ圏系の教材であったことに由来する。ベートーヴェンの弟子であったツェルニー Karl Czerny (1791-1857) はもとより、バイエル Ferdinand Beyer (1803-1863) も時代的に、古典派の作曲家であり、当時までの楽曲の演奏のためのピアノ教本の作曲家である。しかし、我国では、長年、教員試験や、保育士試験に課題曲となっていたことから、教員養成校でも使用されることが多く、いまだに、導入あるいは練習教材としての定番となっている。

1950 年以降、各国で新しい多くのピアノ教則本が出版され、わが国でも 1970 年以降、ピアノ教本の出版が急増、全調メソッドを中心とする体系的な教材は、近現代の作品の導入も含めて、ピアノ教育界では画期的であった。

ピアノ教材が、どのような内容で、どのような対象への適性か、について、今まで経験から感覚的にとらえていることが多く、細かく分析された研究が少ない。それ故、筆者は、これまで、さまざまなピアノ教材をより具体的な分析から、内容の検討を試みてきた。

ピアノ指導においても、教材の良否は、使い方、指導法によりかわってくるが、練習目的・対象者により、最適な教材の取捨選択には、柔軟な感覚による幅広い教材の開拓と教材研究が必要である。そのことから、本研究では、バイエルや、ツェルニーなどドイツ系の一連の教材に対し、フランス系の教則本「メトード・ローズ」終了後の練習曲集として使用され、ツェルニーと同様、テクニクの練習教材として、長年日本で出版紹介されている Le Couppey 作曲の「ピアノの練習 ABC」Op 17、「ピアノの練習曲ラジリテー」Op 20 の検討を試みた。

フランスの 2 冊の練習曲の比較と特徴を分析することが、ピアノ指導において、練習対象者に、それぞれの目的、能力に応じ、より有効的に、かつ適切な教材の選択の上での一助となることを

目的とした。

### 1. Le Couppey の教材の紹介までの流れ

明治12年に文部省は「音楽取調掛」を創設し、はじめて唱歌教育の普及と音楽教員の養成を目指した。その実践として、明治13年3月アメリカのボストンよりメーソンが招聘され、彼により日本に紹介されたピアノ指導書に、ドイツの教材バイエルがふくまれていた。教員養成にバイエルが使用された源流である。貧弱な音楽的環境といえるこの時代は、バイエル、それに続くツェルニーから学んだ、音符を追い、指を機械的に動かすレベルを保つことが優先された奏法であった。その後、ショルツ、コハンスキー、レオ・シロタが指導にあたり、それにやや急進的なクロイツェーが加わり、その門下には、高折宮次、井口基成、豊増昇、永井進、水谷達夫など、数多くの門下が育ち、戦前の東京音楽学校におけるピアノ教育の発展期を迎えた。

大戦後、日本人として始めてパリ国立音楽院に入学、ラザール・レヴィに師事、帰国後、その奏法を日本で指導した安川加寿子を中心とするフランスアカデミー派が、戦前までの堅苦しいドイツ的、技巧中心的な日本のピアノ界にその抒情性、柔軟な音楽をもって新風を送り込んだ。彼女によりフランスで用いられている教則本「メトード・ローズ」が、昭和26年に翻訳、出版された。入門教本としてそれまで長年必修書とされていたバイエルにこの教本が加わり、昭和27年に「ピアノの練習ABC」Op 17、昭和28年「ピアノの練習曲ラジリテー」Op 20、と続けてLe Couppey 作のフランスの練習教材が翻訳、出版された。このフランスの一連の教材は、以後、ドイツ系に次いで、広く使用されている。子どものコンクールなども、課題曲としてツェルニーと並び取り上げられている。

### 2. Le Couppey について

パリ生まれの作曲家 Felix Le Couppey (1811-1887) はショパン、シューマンと同時期生まれのロマン派時代のフランスのピアニスト、音楽教育者、作曲家である。パリのコンセルヴァトワールで和声と伴奏法をドゥルラン Dourlen に学び、1825年にピアノの1等賞を得ている。1828年より師の助手を務め、1837年ソルフェージュの教授に、その後、1854年から師の後を継ぎピアノ科教授として1886年死の前年までピアノの指導に当たり、ピアノ教育に大きな業績を残した。

### 3. 「ピアノの練習「ABC」Op 17 (音楽之友社)、「ピアノの練習曲ラジリテー」Op 20 (音楽之友社) 2つの作品について

Le Couppey がパリコンセルヴァトワールのピアノ科の教授をしている1854年から1886年の

間に作曲された、9段階、15巻の教育用の曲集「ピアノコース」のなかの2冊である。ピアニストでフランスに留学していた安川加寿子氏により、昭和27年、当時初めてフランスのピアノ練習教本として紹介された。

## II 研究対象曲と研究方法

### 1. 研究対象曲

#### (1) Le Couppey 作曲「ピアノの練習 'ABC」(音楽之友社) 25 曲

1952年音楽之友社より発行される。校訂者の安川加寿子は「メトード・ローズ」を終わった後の練習に適している、と冒頭に述べている。全音楽譜出版社からは「ルクーペ ピアノのアルファベット」と題されている。全曲各1ページの短い曲で25曲の前にアルファベット(Jは省略)がつけられた予備練習が付いている。以後、ABCと記す。

#### (2) Le Couppey 作曲「L'AGILITE」25 曲

昭和28年発行で難易度がツェルニー30番前半で、メカニックな指の訓練に適した練習曲ラジリテは敏活、軽快の意味。全音楽譜出版社からは「ルクーペ ピアノの練習ラジリテ」と題されている。訳者の安川はLe Couppeyの「ピアノのアルファベット」の次のレヴェルに位置する作品でABCが終わって使用するとよいと述べ、さらにこの曲集が終わってからツェルニー30番に進むことを勧めている。11曲は見開き2ページ、残る14曲は1ページの短い曲で構成され、全曲1ページのABCより一曲が長めになっている。以後ラジリテと記す。

### 2. 分析方法

ABCとの各25曲の(1)調性、(2)拍子と弱起の有無、(3)速度、(4)リズム、(5)音域、(6)奏法としての練習目的を調べ、(4)リズム、(5)音域についてはグラフ化することでこれらの視点からの教材全体の特徴を把握できるようにした。この教材は、芸術的楽曲というより、音階練習など、楽曲を弾くための奏法や、指の訓練のためのメソッドとしての意味合いが強いことから、旋律に関する視点やハーモニーは今回分析からはずした。

## III 結果と考察

### 1. 調性

大きな特徴は、ABC、ラジリテとも短調の曲がない。全曲明るい長調である。しかしABCで

は、5曲の短調への転調をふくめ、16曲に転調がみられた。平易な短い曲の中での転調による音の変化は、魅力のある音の流れがあり、音楽的变化があると言ってよいだろう。部分転調よりA-B-Aで中間部を転調で雰囲気を変える手法が多く用いられている。ラジリテは、部分転調が多く、単調なリズムの中での音の色の变化は楽しめるといえよう。

表1 ABCの調子、拍子、音域、技能目的

曲番	調子 ●印弱起	拍子	音 域		技 能 目 的
			左	右	
1 A	C:	2/2	•E-F•	•••C-A	左右、各手のなめらかな音階、Aはハ長調の音階
2 B	A:	4/4	•E-E	••E-•E	右旋律音楽的なスラー、左手柔らかい伴奏、イ長調の音階
3 C	G:	3/4	•D-D	••A-•A	右大きなスラーの旋律の表現
4 D	C:	3/4	•G-D	••A-•A	右大きなスラーの旋律の表現、リズムックな左手伴奏
5 E	G:	2/2	D-G•	••E-A	ブーレ(古いフランスの舞曲)、右スラーの表現
6 F	C:●	3/8	G-G•	•••E-•C	リズムックな3拍子、スラーとスタッカートの対比
7 G	A:	4/4	•H-E	••A-•E	右スラーの呼吸感の表現、左保持音
8 H	F:●	4/4	•G-B•	••E-•D	右弱起の表現、左なめらかな伴奏
9 I	C:	6/8	•F-G•	••A-G	2小節フレーズの表現、スタッカートの連打
10 K	F:	3/4	•C-G•	•••D-•G	音楽的な3拍子、左保持音
11 L	G:	2/2	•E-G•	••D-B	4声のスラー
12 M	E:	3/4	••E-C	•••G-•E	右大きなスラーの旋律の表現、リズムックな左手伴奏
13 N	C:●	4/4	•A-E	••F-•F	右弱起の表現、左なめらかな伴奏
14 O	G:	4/4	•G-D	••G-•D	右連打、左保持音
15 P	F:	4/4	•D-C	••D-•D	左大きなスラーの旋律の表現、右トリルの伴奏
16 Q	C:	4/4	•G-D	••A-•E	右大きなスラーの旋律の表現、左なめらかな伴奏
17 R	F:	4/4	B-C	••G-•C	右スラーとアクセントの対比、左なめらかな伴奏
18 S	C:	4/4	••G-C	••A-G#	左右の連結によるスラーの表現
19 T	F:	4/4	•F-F•	••F-•F	右、和音による大きなスラーの表現、左、同リズムの連続
20 U	E:	3/4	•F-A•	••G-•C	三連音符の練習
21 V	A:	3/4	•A-B•	••B-•C	なめらかな音階の旋律表現、
22 W	G:	3/4	•D-G•	•B-•G	左の低音部レガートの奏法。Wでは保持音による指の独立
23 X	F:●	3/8	•G-G	••A-•F	同音型での旋律の流れの表現、Xでは半音階
24 Y	G:	2/4	•D-B	•••G-•D#	スタッカートの跳躍
25 Z	E♭:	3/4	•G♭-E♭	••G-D	脱力を必要とするスラーと保持音、8分音符のなめらかな奏法

表2 ラジリテの調子、拍子、音域、技能目的

曲番	調子 弱起なし	拍子	音 域		技 能 目 的
			左	右	
1	C:	4/4	C・-・A	C-・・・G	右手音階練習, 部分左手
2	C:	4/4	G・-・D	・D-・・・G	右手 345 の指の均等な動き
3	F:	3/4	C・・・F	・C-・・・A	左右個々のなめらかな音階練習
4	G:	3/4	C-・D	・C#-・・・E	左右伴奏音型に含まれる旋律の奏法
5	C:	2/4	C-・・・C	・C-・・・E	5 連音符
6	G	3/4	G-・・・G	G-・・・G	右手なめらかな音階練習
7	C:	3/8	C-・B	E-・・・G	右手連打の伴奏型のなかで旋律の表現
8	D:	3/4	A・・・F	A-・・・B	右手広い音域の音階練習
9	C:	4/4	G-・・・D	・D-・・・D	左右の 6 連符による 345 指の強化
10	A:	4/4	A・・・A	A-・・・C	流れるような音階とそれに対応する旋律の表現
11	F:	6/8	F-・・・F	A-・・・D	右手のトリルの練習
12	C:	4/4	C-・・・B	C-・・・G	同音型の送り指の練習
13	B♭:	4/4	B♭-・・・	A-・・・G	右手音階練習
14	C:	3/4	B-・・・F	・C-・・・C	右手半音階
15	E: ♭	6/8	B♭-・・・E♭	・D-・・・F	右手中心の音階練習
16	G	4/4	G-・・・G	・E-・・・G	右手の半音進行の同音型反復
17	F:	4/4	F-・・・C	G-・・・F	伴奏音型中の旋律の表現
18	G	2/4	G-・・・E	・C#-・・・G	1 指軸の右手のポジション移動
19	E:	3/4	G-・・・E	B-・・・G	右手中心の上下行の音階
20	G	4/4	G-・・・G	・A-・・・G	伴奏音型中の旋律の表現
21	F:	2/2	B-・・・F	・D-・・・D	3 度の分散音型
22	A: ♭	3/4	E-・・・A	・C-・・・B♭	なめらかな右手の音階
23	F:	3/4	C-・・・E	B-・・・E	左右交替での両手の半音階練習
24	G	6/8	C#-・・・G	B-・・・G	送り指でのポジションの移動
25	F:	2/4	F-・・・B♭	・F-・・・G	スラーのかかった 2 音の連続

表3 調 性

調 性	C:	G:	D:	A:	E:	F:	B♭	E♭	A♭	計
A B C (25 曲中: 曲)	7	6	0	3	2	6	0	1	0	25
(%)	28	24	0	12	8	24	0	4	0	100
ラジリテ (25 曲中: 曲)	7	6	1	1	1	6	1	1	1	25
(%)	28	24	4	4	4	24	4	4	4	100

長調に関しては、ハ長調 28%、ト長調 24%、ヘ長調 24%が多く、この3種の長調（76%）で全体の4分の3を占めていることから、2作品とも調号が少ない調子が多く、その分、読譜に関してはやさしく、入りやすいと言える。

## 2. 拍子と弱起の有無

4分音符を1拍とする拍子の合計がABCは86%、ラジリテは84%とほぼ同数である。その中で3/4拍子が全体の約3分の1を占め、2/4、4/4が多く、3拍子系が少ない子どもの歌唱曲（笠井2008）などに比べ、多く取り上げられている。ABCで特徴的なことは、3拍子を、大きく1小節1拍に揺れとして、感じて弾くことを求めている曲が多いことである。ロマン派の時代の作品であることから、変拍子はなかった。弱起の曲は、ABCには4曲あったが、ラジリテにはなかった。

笠井の先行研究では、子どもの使用度の高い歌唱教材の曲の旋律では8分音符を拍とする拍子3/8、6/8が極端に少なく、それらは101曲中1曲であった。それに比べると、3/8、6/8が含まれている割合は、ABC 14%、ラジリテ 16%と多いといえよう。ピアノの作品を学習する場合、これらの拍子は、民謡、古典舞曲、タランテラ、舟歌はじめ、外国曲を学ぶ上で、大切な拍子であるため、多くの経験があってもよいと考える。

## 3. 速 度

ABCとラジリテに特徴的な差が見られた。

速いテンポ指示が多いツェルニーと比べABCは、練習曲とはいえ、旋律にスラーのついた、なめらかな曲が多く、練習曲としてはModerato（中庸な速さで）が28%と多い。AndantinoやAndanteのようにModeratoより遅い曲が32%あり、速いといってもAllegretto（やや速く）が多く、全体的には、のどかにスラーを感じて弾く曲が多い。対するラジリテでは、Alleguro（速

表4 拍子

拍 子		2/4	4/4	2/2	3/4	6/8	3/8	曲数 (曲)
A B C (25 曲中)	曲 数 (%)	1 4	10 40	3 12	8 32	1 4	2 8	25
	曲数小計 (%)	14 (56%)				3 (12%)		
ラジリテ (25 曲中)	曲 数 (%)	3 12	9 36	1 4	8 32	3 12	1 4	25
	曲数小計 (%)	13 (52%)				4 (16%)		

表5 速度

教材	① A B C (25曲)		② ラジリテ (25曲)	
	曲数	%	曲数	%
Allegro	3	12.0	14	56.0
Allegro Moderato	1	4.0	4	16.0
Allegretto	5	20.0	6	24.0
Allegretto Moderato	1	4.0	0	0.0
Moderato	7	28.0	1	4.0
Andantino	6	24.0	0	0.0
Andante	2	8.0	0	0.0
計	25	100.0	25	100.0

く)が56%であり、96%が「速い」に属する速度記号であった。このことから、ラジリテは全25曲、指の速い動きをマスターさせる作品であることがわかる。遅い速度記号が付いている曲は皆無であったことから、速い音階や、パッセージの練習が第一に求められる曲集であると言ってよい。

#### 4. リズム

##### (1) リズム分析の方法

音符(休符も含む)、音型の出現を曲ごとにカウントした。拍を取る上で、セットとして考える方が自然なリズムをパターン(音型)として数えた。これらを、付点のリズムや、シンコペーションのリズムなどのグループ(A類からH類)に分け出現率を比較した。ただし、1曲中に同じ音符やパターンが複数回出ても、その音符、パターンの出現は曲数として1と数えた。今回タイで結ばれるパターンは、複雑なリズムやタイによりシンコペーションがおきるものが少なく、単に拍が伸びるものが多かったため、また、タイのついたリズムを取る際、タイを取って個々の音符の音価を意識して数えることから、個々の音符として分離してカウントした。

6/8拍子の特徴的なリズムを学ぶことは、音楽的に重要であると考え、8分音符を1拍とする3/8、6/8拍子は1拍の音符が異なり、25曲中ABCで3曲、ラジリテで4曲と少なく、しかも、1曲中のパターン数が少ないことも特徴であったため、表6、表7、表8は4分音符を拍とする拍子について(ABC 22曲、ラジリテ 21曲中)の結果である。この表のリズムについては、比較のために、筆者による保育でよく歌われる歌唱教材の旋律の部分のリズムの調査(2008)との比較を示した。




表6 各教材のリズムパターンの種類




種 類	① A B C (種類)	② ラジリテ (種類)	参考：歌唱教材 (種類)
A類 拍子の拍打ちで数えられるリズム	7	6	7
B類 1拍の2分割群=8分音符群	3	3	3
C類 付点のリズム	1	1	4
D類 1拍中の付点のリズムでスキップリズム	0	0	3
E類 シンコーションリズム	0	0	3
F類 1拍の4分割群=16分音符群	1	3	4
G類 連符群, 3連, 6連	1	3	1
H類 1拍の8分割群=32分音符群	0	0	0
計	13	16	25

## (2) リズムの結果

グループ(類)の分類は表6を参照。表6は各類に何種類のリズムパターンがあったかを示す。グループ(類)の詳しいリズムパターンの結果は表7を参照。

表6, 表8から, A類は単純な拍打ちで数えられる音符の種類のため, ABCもラジリテも当然のごとくパターン種が多い。しかし, リズムパターンの種類は, ABCが13種, ラジリテが16種と歌唱教材25種より, かなり少なく, リズムがシンプルであるといえる。

ABCとラジリテの際立つ特徴は, D群  E群  が出現しないことである。この群は, 近現代の作品や, 幼児の歌唱教材には欠かすことのできない, 非常によく使われるリズムである。表7の参考資料の歌唱教材からも, スキップのリズムD群  は48.0%, 約半数の曲に出ている。参考資料では伴奏なしの旋律のみであるが, それでも歌唱教材の方が, はるかに種類が多いことが分かる。

ABCはF類の  の1曲, G類  の各1曲以外, A類(4分音符)100%, B類(8分音符)90.9%。C類(付点)のリズム  22.7%出現だけの, リズム的には非常にやさしい曲集である。1曲中の平均パターン数は, 5.5である(表7)。


ラジリテの特徴は, F群  が際立って多いことである。F群の中でもF-1(16分音符連続)のパターンが16曲と集中している。1曲中の平均パターン数は, 5.8である。ABC, ラジリテとも1曲中のリズムの種類は少なく, リズムはとてもやさしいと言えよう。

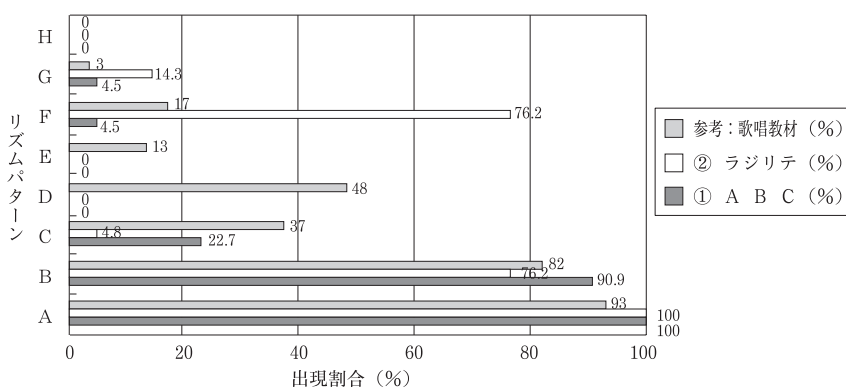
表7の曲数から抜き出したABC3曲, ラジリテで4曲の8分音符を拍とする1曲に含まれるパターン数は, ABC3曲が4, 4, 2パターンで, 1曲の平均パターン数3.3である。ラジリテの4曲ではA群のように拍打ちで数えられるものを意外, 1曲B群のように2分割群(16分音符)が2曲, 連符が1曲, 4分割群(32分音符)2曲あり, 4曲が5, 5, 4, 8パターンで, 平均パターン数が, 5.5でABCよりリズムの種類が多くなっている。

表7 リズムパターン分類

群	6/8, 3/8 拍子除く	リズムパターン	① A B C		② ラジリテ		参考：歌唱教材	
			22 曲中 (曲)	%	21 曲中 (曲)	%	100 曲中 (曲)	%
A	A-1		22	100.0	21	100.0	90	90.0
	A-2		11	50.0	18	85.7	67	67.0
	A-3		21	95.5	21	100.0	39	39.0
	A-4		6	27.3	3	14.3	4	4.0
	A-5		12	54.5	9	42.9	17	17.0
	A-6		11	50.0	9	42.9	6	6.0
	A-7		5	22.7	—	0.0	2	2.0
	パターン数		7		6		7	
A のパターンを含む曲数		22	100.0	21	100.0	93	93.0	
B	B-1		17	77.3	1	4.8	76	76.0
	B-2		4	18.2	1	4.8	14	14.0
	B-3		5	22.7	16	76.2	37	37.0
	パターン数		3		3		3	
	B のパターンを含む曲数		20	90.9	16	76.2	82	82.0
C	C-1		5	22.7	1	4.8	26	26.0
	C-2		—	0.0	—	0.0	13	13.0
	C-3		—	0.0	—	0.0	1	1.0
	C-4		—	0.0	—	0.0	3	3.0
	パターン数		1		1		4	
	そのパターンを含む曲数		5	22.7	1	4.8	37	37.0
D	D-1		—	0.0	—	0.0	48	48.0
	D-2		—	0.0	—	0.0	2	2.0
	D-3		—	0.0	—	0.0	1	1.0
	パターン数		0		0		3	
そのパターンを含む曲数		0	0.0	0	0.0	48	48.0	
E	E-1		—	0.0	—	0.0	11	11.0
	E-2		—	0.0	—	0.0	4	4.0
	E-3		—	0.0	—	0.0	1	1.0
	パターン数		0		0		3	
	そのパターンを含む曲数		0	0.0	0	0.0	13	13.0
F	F-1		1	4.5	16	76.2	7	7.0
	F-2		—	0.0	1	4.8	—	0.0
	F-3		—	0.0	—	0.0	—	0.0
	F-4		—	0.0	5	23.8	14	14.0
	F-5		—	0.0	—	0.0	1	1.0
	F-6		—	0.0	—	0.0	1	1.0
	パターン数		1		3		4	
	そのパターンを含む曲数		1	4.5	16	76.2	17	17.0
G	G-1		1	4.5	—	0.0	3	3.0
	G-2		—	0.0	1	4.8	—	0.0
	G-3		—	0.0	1	4.8	—	0.0
	G-4		—	0.0	1	4.8	—	0.0
	パターン数		1		3		1	
そのパターンを含む曲数		1	4.5	3	14.3	3	3.0	
H	H-1		—	0.0	1	4.8	—	0.0
	パターン数		0		0		0	
	そのパターンを含む曲数		0	0.0	0	0.0	0	0.0
タ イ			8	36.4	6	27.3	17	17.0
弱 起			6	27.3	0	0.0	5	5.0
曲中のパターン平均			5.5 パターン		5.8 パターン		4.8 パターン	

表8 リズムパターン

群	① A B C (%)	② ラジリテ (%)	参考：歌唱教材 (%)
A	100.0	100.0	93.0
B	90.9	76.2	82.0
C	22.7	4.8	37.0
D	0.0	0.0	48.0
E	0.0	0.0	13.0
F	4.5	76.2	17.0
G	4.5	14.3	3.0
H	0.0	0.0	0.0



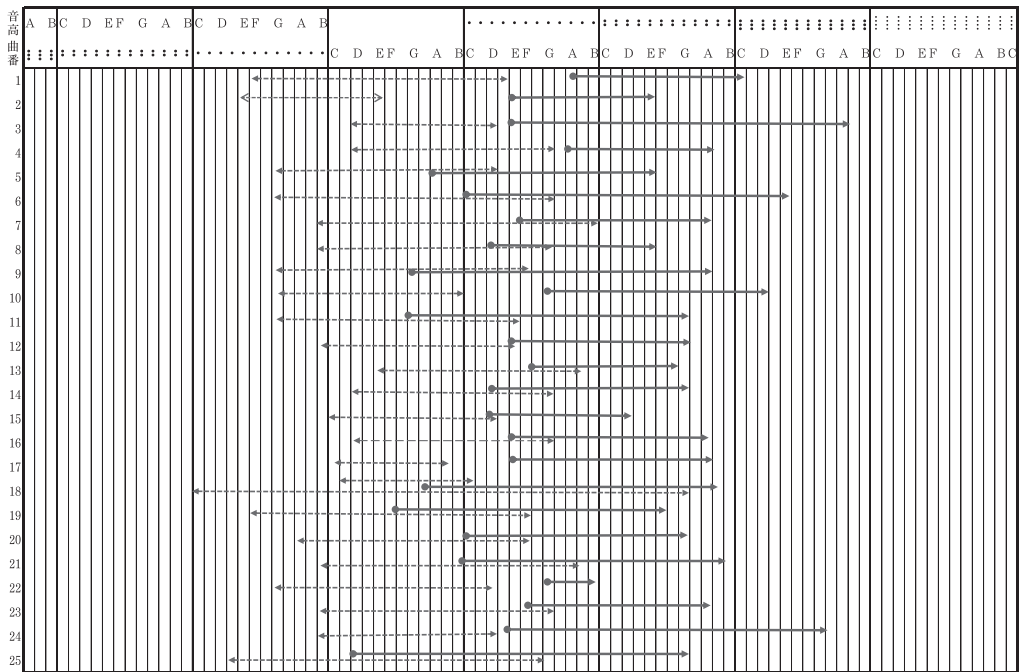
グラフ1 教材ごとの群別リズムパターン (A~H) の割合

## 5. 音 域

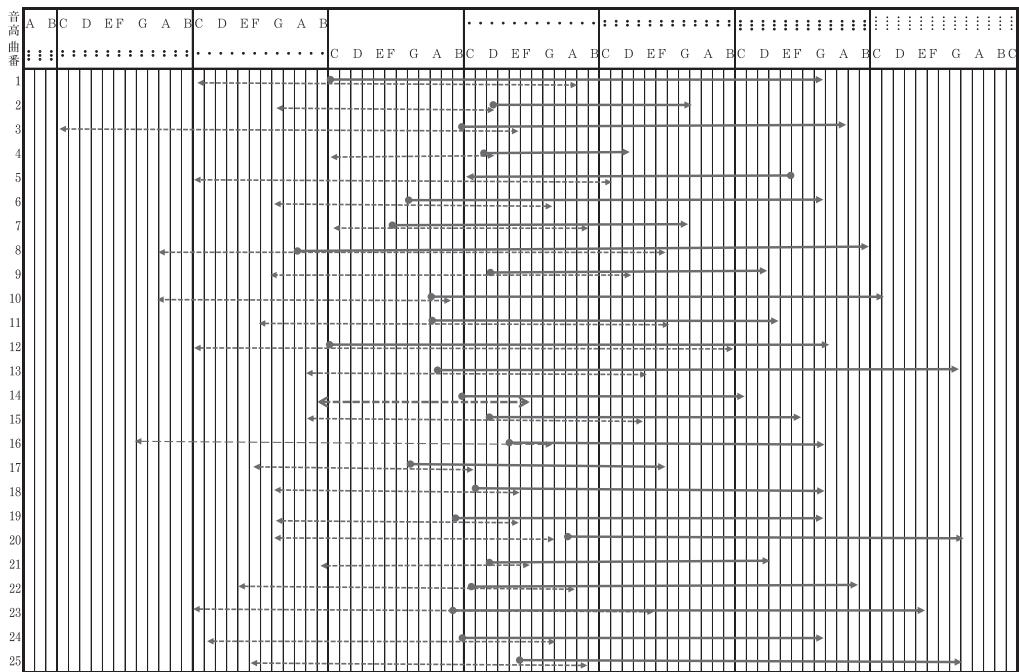
各曲の演奏音の左右それぞれの使用最高音と最低音を抜き出し使用音域とした。右手＝直線、左手＝点線で表した。

ABCは、ほぼ3オクターブ内の音域での曲であるため、幅広い音域の読譜力をつけるには、十分な教材ではない。しかし初心者が五線内の読譜に慣れ、ゆとりをもって音楽的な方に力点を置くには、あえて、急に音域を広げた教材を使う必要はないと考える。

左右の音域が明らかにラジリテのほうが広い。この点では、ABCを終了して、使用すると、両作品のお互いのマイナス面を補える点で、よりよいであろう。これは、ラジリテのほうが、音階の練習が多く、高音域、低音域の読みにくい譜面の読譜に慣れるためにはよい。左右の音域が、重なる曲が多いのも特徴である。しかし、音域がせまい歌唱教材を勉強する目的の人にとっては、無駄が多く、適した教材とはいえない。高度なピアノ作品を演奏するための視覚的な読譜の慣れ



グラフ 2 ABC 音域表



グラフ 3 ラジリテ音域表

の訓練には適していると思われる。リズム自体は16分音符のシンプルなものが多いので、急に難度が上がることなく、高低の譜読みの弱い人のためのステップとしての練習として適していると言えよう。

## (6) 奏法としての練習目的

### ① ABC

スラーの奏法に力点が置かれ、やわらかい音の動きがもためられる曲が多い。1フレーズを大きな呼吸を感じて弾かなくては表現できない、おおらかな旋律の表現の習得が、やさしい譜面の中に要求されている。ロマン派の旋律の表現に欠かせないテヌート奏法を早くから学ぶためにも適していると思われる。ABCはリズムや音域、テンポから見ても、旋律がたいへんシンプルだが、転調も多く、音の流れがたいへんきれいであり、何よりも、指を速く動かすテクニックではなく、スラーのなめらかさの表現、それは、同時に手首や、腕の脱力を簡単な旋律の中で習得するという、のちのち奏法として欠かせない大切なことを目指せる教材である。とかく機械的に、速く指が動くことに上達の価値観を置きやすい中、この曲集でこの面を重視して指導するためには、たいへん価値ある教材と言えよう。ツェルニー30番は、指を動かすための奏法には非常に多面的な要素があるが、そこで一番欠けている音楽的で、旋律的な表現が、ABCで要素として重視され、習得できる教材であると考えられる。

### ② ラジリテ

音楽的なABCよりかなり練習曲的性格の強い教材である。テンポの速さの要求も高く、16分音符の音階練習が多く、右手に偏っているため、変化に乏しく、学習者、特に幼児にとっては、音楽的興味や楽しさが損なわれる懸念を持つ。それゆえ、練習目的を選択、抜粋して使用するとよいと考える。

難度としては、よりツェルニー30番に近いが、奏法の練習課題はツェルニー30番より、シンプルである。しかし音の流れは、ツェルニー30番より、ロマン的な優雅さが感じられる。

## IV おわりに

以上のさまざまな、分析から、ABCは、リズムもやさしく、音域幅も広くなく、比較的速さもゆっくりであることから、脱力によるスラーや、音楽的な旋律の表現を目指すには大変有効な教材であることが明確になった。曲の長さや要素の単純さからも小さい子どもたちに適していると思われる。一方、ラジリテは多分にテクニック的な要素の強い教材である。双方、対極的な教材であることから、曲目選択の上、組み合わせての使用が望ましいと思われる。しかし、時間の

限られた、また歌唱教材を弾くことを目的とした、教員養成の教材としては、奏法に時間を取られすぎ、適切な教材とはいえないであろう。

ABC, ラジリテは題名のついた、イメージある楽曲でなく、あくまで、練習曲としての教材の分析であったため、ハーモニーや音楽的表現の分析での片手落ちは否めない。教材を、相手に合わせ、いかに指導するかで結果が変わるが、教材研究を今後も深めることで、より良き、効果的なピアノ指導を心掛けたと思っている。

#### 参考引用文献・楽譜

- Le Couppey 安川加寿子校訂 (1952)「ピアノの練習 ABC」音楽之友社  
Le Couppey 安川加寿子校訂 (1953)「ピアノの練習ラジリテ」音楽之友社  
Le Couppey 田村宏「クーペ ピアノのアルファベット」Op 17 全音楽譜出版社  
Le Couppey 田村宏「クーペ ピアノの練習ラジリテ」Op 20: 3 全音楽譜出版社  
浅香淳 新訂標準音楽事典トワ (1966) 音楽之友社：2127  
笠井かほる (2008)「保育者養成におけるピアノ教材の検討 ― リズム分析を通して ―」聖学院大学総合研究所紀要 No. 40: 111, 123-126  
千歳八郎 (1989)「ピアノ学習ハンドブック」春秋社：88-90  
笠井かほる (2009)「保育者養成における音楽教育へのまなざし ― ピアノ指導と歌唱指導に視点をあてて ―」『まなざしの保育理論と実践』林信二郎, 梅澤実編著 ななみ書房：110-111  
宮脇長谷子・笠井かほる・井口太「幼児の歌唱教材に関する一考察 ― バイエルとの比較分析を通して ―」(1990) 鶴川女子短期大学研究紀要 13 号：15

(2010年9月30日提出)